

言語能力の向上を目的とした事前事後学習課題の意義
—求められる資質・能力とアクティブ・ラーニングの視点から—

林 崎 治 恵*

The Significance of a Task to Improve Language Skills
—From the Viewpoint of the Abilities and Active Learning—

Harue Hayashisaki

変化が激しい新しい時代に向けてこれまでに掲げられてきた育成すべき様々な資質・能力について振り返り、言語能力の位置付けを確認する。教育機関においては学習指導要領や中央教育審議会による指針があり、産業界からは社会人基礎力などが示される。さらに、キャリア教育・職業教育や Society 5.0 に向けた人材育成の立場からの提言もある。それらの検討から基礎的・基本的な知識・技能や言語能力の重要性を再認識できる。また、筆者が担当する「言葉と表現Ⅰ」で行った事前事後学習（自宅学習）の学生自身による振り返りを分析する。当該課題には言語能力の向上に役立つ、今後の主体的な学修に繋がる、人間の核となる考える力の重要性に気づかせるといった要素があり、資質・能力を統合的に高める素地を作ると考えられる。当該課題は協同的な学習を通じたアクティブ・ラーニングではないが、一般的なアクティブ・ラーニングの特徴に合致し、学生自身の気付きや能動的な学びを促すことができるといえよう。

Key words: 言語能力、資質・能力、事前事後学習（自宅学習）、アクティブ・ラーニング

はじめに

大学生の国語力の低下を補うための日本語表現や文章表現等の科目が大学のカリキュラムに設置されて久しいが、近年はそれに加えて、大学での学びに必要なスキルを身に付け、高等学校から大学へと円滑な移行を図ることを目的とした初年次教育が行われている。この初年次教育には、レポートの書き方や文章表現などの言語能力に関する内容も含まれる。

筆者が担当する科目は、そういった言語能力の向上を図る内容が含まれる科目群が多いが、そのなかで保育学科1年生前期に開講されている「言葉と表現Ⅰ」で課した事前事後学習に焦点を当て、その課題が学生の自らの学びにとってどのような意義があったのかを、近年様々に掲げられている、未来を生きるために必要な資質・能力を踏まえ、言語能力の位置付け確認したうえで検討する。合わせて、アクティブ・ラーニングの視点から言語

能力の育成における課題の意義を改めて捉え直すことを目的とする。

1. 新しい時代に向けた資質・能力について

まず、これまでに掲げられた資質・能力を3つの段階—高等学校までと大学と社会や職場—ごとに整理し、言語能力の位置付けを考える。

1-1) 幼稚園から高等学校までの3つの柱

平成28年12月21日に中央教育審議会から答申された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」を受けて、新しい教育要領と学習指導要領が公示された。^{注1)} 新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指して、教育課程全体を通じた三つの柱、即ち、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」③「どのように社会・

* 四條畷学園短期大学 保育学科

世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）がたてられた。幼稚園から小学校・中学校・高等学校を通してそれらの育成を目指す。

この方向性は、平成8年に中央教育審議会において示された「生きる力」を基盤としている。^{注2)}「生きる力」は、国際化や情報化の進展など、変化が激しい時代のなかでこれから求められる資質や能力であり、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」と「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」として定義されている。そして、平成21年4月の学習指導要領は、平成18年12月22日に公布・施行された教育基本法の改正で示された、新しい時代の教育の基本理念^{注3)}を受けて、「生きる力」を「知・徳・体のバランスのとれた力」として「確かな学力、豊かな人間性、健康・体力」をバランスよく育てることを目指して告示されるが、この「生きる力」はこれまでの学習指導要領でも目指してきたものであり、これからも変わらないことを謳っている。現行の3つの柱はこの流れのなかで示されたものである。

1-2) 大学の学士力

一方、大学に関しては、中央教育審議会が「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～」をまとめている。^{注4)}その概要には、学士力に関する主な内容として以下の4つが挙げられている。^{注5)}

1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解（多文化の異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解）

2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）

3. 態度・志向性

自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

4. 統合的な学習経験と創造的思考力

自らが立てた新たな課題を解決する能力

非常に幅広い力が求められている。大学が国家の高等教育機関であり、社会を担う主体を育成することを鑑みれば当然とも言えよう。では、その社会で求められる力はどのように考えられているだろうか。

1-3) 社会や職場で求められる力

経済産業省は、職場や地域社会で求められる能力を「社会人基礎力」として平成18年より提唱している。社会人基礎力に関する研究会が発表した「中間取りまとめ」によると^{注6)}

- ①「前に踏み出す力」（アクション）～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～
- ②「考え抜く力」（シンキング）～疑問を持ち、考え抜く力～
- ③「チームで働く力」（チームワーク）～多様な人とともに、目標に向けて協力する力～

の3つの力を「社会人基礎力」と定義している。さらに、平成30年には、この社会人基礎力に新たな3つの視点、即ち「何を学ぶか（学び）」「どのように学ぶか（組み合わせ）」「どう活躍するか（目的）」を組み合わせた「新・社会人基礎力」が提言されている。^{注7)}

また、公益社団法人経済同友会は、企業が求める人材像と必要な資質・能力として以下の4つを示す。^{注8)}

- ・変化の激しい社会で、課題を見出し、チームで協力して解決する力（課題設定力・解決力）
- ・困難から逃げずにそれに向き合い、乗り越える力（耐力・胆力）
- ・多様性を尊重し、異文化を受け入れながら組織を高める力
- ・価値観の異なる相手とも双方向で真摯に学び合う対話力（コミュニケーション能力）

若者に求める資質・能力について産業界からも提示される流れのなか、中央教育審議会は平成23年に、学校段階ごとの考え方や、教育界、産業界等ごとの立場を越えて、各界が一体となって取り組む必要性を提言する。^{注9)}その提言のなかで、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力に含まれる要素として以下の5つを挙げている。

- ・基礎的・基本的な知識・技能
- ・基礎的・汎用的能力
- ・論理的思考力、創造力
- ・意欲・態度及び価値観
- ・専門的な知識・技能

ここで注目されるのは、学校教育で育成される「確かな学力」^{注10)}に内包される「基礎的・基本的な知識・技能」が明確に提示されていることである。この基礎的・基本的な知識・技能は学力の根幹をなすものである。^{注11)}この力が、学士力や社会人基礎力や企業が求める資質・能力に明示されていないのは、恐らく当然備えておくべきものであるという暗黙の前提があったことによると考えられる。従来、教育の世界と社会や産業界の世界は断絶されていたに等しかったが、この両者を接続させ、連続性を持たせて捉え直したとき、つまり、学校におけるキャリア教育・職業教育を考えたとき、学校教育で育成し、また、確実に押さえておく必要のある力として再認識されたのであろう。まさに、近年問題とされている「若者の社会的・職業的自立」や「学校から社会・職業への移行」を解決するために必要な力として必要不可欠な要素である。

なお、先に記した社会人基礎力については、その普及における誤解が生じないように、『社会人基礎力』育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～において、基礎学力や専門的な知識・スキルがあって初めて発揮されるものであり、社会人基礎力を育てるだけでは十分とはいえないことが記されている。基礎的・基本的な知識・技能があつての社会人基礎力ということである。

1-4) 言語能力の位置付け

ここで、拙稿で検討する内容に直結する言語能力の位置付けを確認したい。

言語能力はすべての学習の基盤となるが、1-1)で記した3つの柱となる資質・能力に照らして捉えても言葉は重要な役割を果たす。^{注12)}即ち、教育課程部会による「言語能力の向上に関する特別チームの審議の取りまとめ」において以下のように述べられている。^{注13)}

i) 知識・技能

学習内容は、その多くが言葉によって表現

されており、新たな知識の習得は基本的に言葉を通じてなされている。また、言葉を使って、知識と知識の間のつながりを捉えて構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。

具体的な体験が必要となる技能についても、その習熟・熟達のために必要な要点等は、言葉を通じて伝えられ理解されることも多い。

ii) 思考力・判断力・表現力等

教科等の特質に応じられる「見方・考え方」を働かせながら、思考・判断・表現するプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言葉が重要な役割を果たしている。

iii) 学びに向かう力・人間性等

子供自身が、自分の心理や感情を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力（いわゆる「メタ認知」）の獲得は、他者からの言語による働き掛けや思考のプロセスの言語化を通じて行われる。また、言葉を通じて他者とコミュニケーションを取り、互いの存在について理解を深めていくことにより、思いやりや協調性などを育むことができる。

そして、言語能力を構成する資質・能力を踏まえば、言葉に関わる知識・技能や態度等を基盤に、「創造的・論理的思考」、「感性・情緒」、「他者とのコミュニケーション」の三つの側面の力を働かせて、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりする能力が言語能力であると整理づける。

前節において、社会・職業への円滑な移行に必要な力に含まれる要素のうち、基礎的・基本的な知識・技能の明確な提示があつたことについて指摘したが、言語能力があらゆる資質・能力の育成の基盤になることを合わせて考えれば、言語能力そのもののさらなる重要さが浮き彫りになったと言えるであろう。

さらにつけ加えるならば、平成30年6月5日に、Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会及び新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォースによる「Society 5.0に向けた人

材育成～社会が変わる、学びが変わる～」が公表された。そこには、共通して求められる力として、①文章や情報を正確に読み解き、対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力が挙げられている。これは、知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、言葉や文化、時間や場所を超えながらも自己の主体性を軸にした学びに向かう一人一人の能力や人間性が、どのような時代の変化を迎えるとしても、これからの社会で人間らしく豊かに生きていくために必要である、との考えから導き出されたものである。①に、まさに言語能力そのものが挙げられていることは、これまでにさまざまに提示された資質・能力の流れを考えれば当然の帰結であろう。社会の変化を見据えながら、迎える時代に応じた資質・能力の第一が言語能力なのである。

2. 事前事後学習課題について

言語能力の向上を図るひとつの授業科目で課した事前事後学習について、その内容と学生の振り返りの集計結果を述べ、考察をする。

2-1) 事前事後学習課題の内容

学生に課した事前事後学習課題は、予習復習というより自宅学習として位置付け、①新聞記事、或いは本を読むこと、②読んだその記事、またはその文章のなかでわからない単語の意味を調べること、③読んだ内容に対する考えや感想を書くことの3つを課した。①については、文章をたくさん読むことを意識して行う大切さを伝え、できる限り新聞を読むことを薦め、スマホからの情報も可とした。②については、必ず10個の単語は調べるようにさせた。もし、読んだ文章のなかで知らない単語が10個未満であったとしても、知っている(つもの)単語や、読んだ文章以外の単語でも何でもよいとして、必ず10個を課題とした。③は、220字の欄を設け、できるだけ詳しく書くということを伝え作成させた。

自宅学習プリントは事前に配布し、毎時回収した。プリントには、読んだ記事の見出しや日時や新聞名、書名や作者やページ数がわかるように記録する欄を設けたうえで、上記②と③を書く欄を作り、記述を求めた。この課題提出は成績評価の

一部となることを伝えた上で、未提出者への指導は、受講生全体に対して何度か声をかける程度におさめた。当該科目では、この課題以外にも毎回基本的な漢字テスト(約50問)を行い、その漢字テストも成績評価の一部としている。国語が苦手な学生にとっては、自宅学習の全体量はやや重い負担であろうと思われるため、また、他科目の課題もあることを考慮し、学生を追い込むような声かけは控え、しかし、学修としては大切であることへの理解が伝わるように心がけた。

大方はほぼすべての課題の提出ができていたが、提出が継続しにくい学生や、最後まで頑張りきれない学生もなかには何人かいた。

2-2) 課題に対する振り返りの方法

以下の質問によって、この課題に対する振り返りを各人で行う。

自宅学習プリント(事前事後学習プリント)について次の3点に対するあなたの考えを述べなさい。①授業内容とどのような関連があったと考えるか(何のために行ったと考えるか)。②そこから何を学ぶことができたか。③今後どのように生かしていこうと考えるか。

この質問は定期試験の最終問題として解答を求めた。当該科目は、文章表現や文章読解の関連知識を授業内容に含んでおり、その知識を理解し定着されているかをみるための定期試験を行っている。自宅学習プリントは、授業での学習を積み重ねるなかで学んだ内容を実践することによって、いわば復習ともなり得る内容となっている。このことについては授業内で折にふれ示唆したが、課題をこなしている最中に気づかなくとも、試験勉強によって学習内容の全体を理解すれば自ら気づくことも可能である。よって、上記の自宅学習課題の振り返りは、最終の振り返りとして、定期試験の問題として設定した。この部分について、研究材料とすることは学生の承諾を得ている。

2-3) 課題の振り返り記述の結果

保育学科1年生104名が対象であるが、①～③の3項目とも未記述者が1名いる。加えて、①の未記述者が1名いる。記述による振り返りであるため、表現の違いが見られるが、記される内容を忠実に汲み取り記述内容に沿った項目で集計する

よう心がけた。例えば、「毎回感想文を書くことにより、書き言葉を正しく使い、文章構成を自分で考え、句読点を意識して、漢字を正しく使い、文章を書くことに慣れていくためだと思います。また、意味調べをすることにより、わからなかった言葉の意味を理解して、正しい言葉を使えるようにするためだと思います。」という解答には、「書き言葉を正しく使う」「構成(段落)を考える・確認する」「句読点の使い方を身に付ける」「正しい漢字を使う・覚える」「文章を書く力をつける(文章を書くことに慣れるを含む)」「言葉の意味を正しく理解し使えるようにする」の全てに項目でカウントするという方法をとった。内訳は以下のとおりである。

①授業との関連(課題の目的・意義)について

ア 正しい漢字を使う・覚える(誤字脱字をなくすを含む)	30人
イ 書き言葉を正しく使う	22人
ウ 言葉を正しく深く知る	44人
エ 語彙力を高める	21人
オ 句読点を正しくつける	6人
カ 構成(段落)を考える・確認する	13人
キ 正しい表現方法で文章を書く	22人
ク 原稿用紙の使い方を学ぶ	2人
ケ 推敲する	7人
コ よりよい表現にする	3人
サ わかりやすく伝わる文章を書く	7人
シ 考える力を身に付ける	7人
ス 文章を書く力をつける(文章を書くことに慣れるを含む)	40人
セ 文章を書く時の材料を手に入れる	1人
ソ 書く前にメモをとる	1人
タ 自ら調べる力を身に付ける	11人
チ 知識を増やす	13人
ツ 読解力を身に付ける	15人
テ 想像力・発想力を鍛える	2人
ト 社会を知る	3人
ナ 新聞やニュースを読む習慣化をつける	13人
ニ 繰り返すことによって力がつく	2人
ヌ 課題をこなす	1人
ネ 勉強時間を増やす	1人
ノ 文字を美しく書く	3人
ハ 自己責任力をつける	1人

ヒ 信頼される社会人となる	2人
②何を学ぶことができたかについて	
ア 正しい漢字を使って文章を書くこと	11人
イ 正しい言葉の意味	17人
ウ 正しい言葉の使い方	16人
エ 新しい言葉	24人
オ 書き言葉(話し言葉と書き言葉の違いを含む)	18人
カ 句読点のつけ方	11人
キ 文末統一	1人
ク 正しい接続語	2人
ケ 文章構成	5人
コ 表現のしかた	7人
サ 見直すことの大切さ(推敲を含む)	12人
シ 調べることの大切さ	10人
ス あきらめずに最後まで書くこと	1人
セ 伝わりやすくわかりやすい正しい文章作成	17人
ソ 授業で学んだことをいかした文章作成	18人
タ 文章を書く力	4人
チ 文章を書く難しさ	5人
ツ 文章を書く楽しさ	2人
テ 文章を短くまとめること	1人
ト 最も伝えたいことを意識すること	5人
ナ 書く前にメモをとること	2人
ニ 読解力	12人
ヌ 知識や情報が増えたこと	7人
ネ 調べる力	3人
ノ 新聞やニュースを読むことの大切さや習慣づけ	41人
ハ わからない単語を調べた上でニュースを読むことが理解につながることに気づいたこと	2人
ヒ わからない単語を読み流していることに気づいたこと	1人
フ 時事問題を知る楽しさ	1人
ヘ 一般常識	1人
ホ 日常生活でも文章力をつけることができること	1人
マ 日々の積み重ねや課題をこなすことの大切さ	2人
ミ 文字の書き方	3人
ム 自分のボキャブラリーの少なさ	1人
メ 漢字のなりたち	1人

モ 予習復習の大切さ 1人
 ヤ 読んだ記事内容から学んだことを記述したもの（「事件に巻き込まれることから避けられる可能性があること」） 1人

③今後のいかし方について

ア わからない言葉や漢字をすぐに調べる 26人
 イ 知識や語彙を増やす 8人
 ウ 書き言葉を意識する 7人
 エ 誤字脱字に気をつけ、正しい漢字や言葉を使う 27人
 オ 句読点を正しく使う 4人
 カ 文末統一をする 1人
 キ 伝わりやすくわかりやすい正しい文章を書く 19人
 ク 推敲をする 4人
 ケ 構成を意識した文章を書く 4人
 コ メモをとってから文章を書く 3人
 サ 文章をたくさん書く 1人
 シ 表現力を高める 3人
 ス 考えることを継続する・自分の考えを持つ 2人
 セ 速く丁寧に美しく字を書く 6人
 ソ 学んだ言葉や文章を実際にいかす 11人
 タ 新聞や本を定期的に読む 9人
 チ 苦手な政治問題について勉強していく 1人
 ツ 保育者になった時、連絡帳やお便りに正しい漢字・言葉を使い、わかりやすい文章を書く 26人
 テ 社会人として恥づかしくない文章を書く 2人
 ト 保育者として大人として世間知らずとならないように新聞やニュースを今後も読む 16人
 ナ 自分で身に付ける力を保育にも日常にもいかす 1人
 ニ 子ども達に新しい知識を伝えたり、言葉を教えたりする 8人
 ヌ 子ども達に調べることの大切さを教える 1人
 ネ 子ども達に言葉をたくさん知ることが大人になって役立つことを教える 1人
 ノ 子ども達が文章が得意になれるように自分の力を役立てる 1人
 ハ 就職活動の履歴書や面接や小論文に役立てる 8人
 ヒ 実習日誌に役立てる 8人
 フ 授業やレポートに役立てる 6人

ヘ 保育ニュースなどをコミュニケーションに役立てる 5人
 ホ 手紙に役立てる 3人
 マ 子どもや保護者の信頼を得ることに役立てる 2人
 ミ 保育者の道に役立てる 1人
 ム 自宅学習にしっかり取り組んだことをアピールできる 1人
 メ 読んだ記事内容について今後の生かし方を記述したもの（「被災者のサポートをしていきたい」と「事件に巻き込まれないように気を付ける」） 2人

2-4) 事前事後学習（自宅学習）課題の意義

今回の自宅学習課題は、いわゆる予習復習に当たるものではないが、授業で学んだことを活かしながら取り組むことのできる内容になっている。授業内容について何を強く受け止めたのかは個人によって異なるであろうし、欠席等である授業回において学ぶ内容が補われていないということもあるが、全体を見渡せば①～③の解答内容は重なる部分もあるが、授業内容を網羅している。授業で説明したはずであるにもかかわらず解答で全く触れられずに欠落してしまっているという点がないということをもまず押さえておきたい。勿論、学生個人個人の授業内容の理解度には差があり、全ての内容が網羅されているからといってそれが即ち学生の理解度が高いことには直結しないが、ひとりの学生にも理解されないことがないということは、言語能力の向上を図る授業としては重要である。

次に、高等学校まで一貫して育成される3つの柱—知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等—を踏まえて、言語能力を構成する資質・能力の内容^{注14)}と、学生の振り返り記述の内容を照らし合わせると、学生の学びが、言葉の使い方や語句・語彙及び文や文章の構造の理解などの知識・技能をはじめとして、情報を理解したり表現したりするための力が含まれる思考力・判断力・表現力等、そして、言葉を通じて自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度や、様々な事象に触れて感じたことを言葉にすることで自覚したり、言葉を通じて積極的に人や社会と関わったり、自己を表現したりする態度が

含まれる学びに向かう力や人間性等の育成に繋がっていることがわかる。

さらに、質問②の学べたことについては、総合的な力が必要となる文章そのものについての記述(②-ケ・セト・ホ)の合計は延べ70人となり、総合的な言語能力の向上に役立っていると言えよう。そして、このなかに含まれる②-ツ「文章を書く楽しさ」や「伝えたいことが書けたときの達成感があった」という記述(②-セとしてカウントしている)や、②-ス「あきらめずに最後まで書くこと」や、②-ネ「調べる力」、②-フ「時事問題を知る楽しさ」は、それぞれ少ないながらも課題への積極的な取り組みの結果得られたことと理解できる。そして、それは、質問③の今後のいかし方の解答のなかの、③-ア「わからない言葉や漢字をすぐに調べる」、③-サ「文章をたくさん書く」、③-ス「考えることを継続する・自分の考えを持つ」、③-タ「新聞や本を定期的に読む」、③-チ「苦手な政治問題について勉強していく」のように今後の主体的な学修に繋がっていると考えられる。特に、③-タは読書の習慣に繋がりを、将来にわたる言語能力の向上に資するものである。また、③-ス「考えることを継続する・自分の考えを持つ」のような考える力は、人間にとっての核となるものである。その核に迫る内容を学生自らが導き出したことの意義は大きい。

3. アクティブ・ラーニングの視点からの考察

主体的な学習は、近年積極的な導入が謳われているアクティブ・ラーニングと密接な関係にある。アクティブ・ラーニングは、中央教育審議会の用語集^{注15)}に

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

と定義されている。グループ・ディスカッション等の方法が例示されているが、何より肝要なこと

は学修者の能動的な学びであり、主体的な学修である。

以下の(a)～(f)のようなアクティブ・ラーニングの一般的特徴として挙げられる6点^{注16)}を踏まえて本稿で取り上げた自宅学習課題を検討すると、全ての項目が当てはまる。個人で取り組む課題であるが、基礎的・基本的な知識や技能の習得から、情報を理解し自身の考えを形成し、その思考過程を表現し、さらに考えを深化させ、今後の学修に繋げるというプロセスを経験していることになる。

- (a) 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
 - (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
 - (c) 学生は高次の思考(分析、総合、評価)に関わっていること
 - (d) 学生は活動(例:読む、議論する、書く)に関与していること
 - (e) 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること
 - (f) 認知プロセスの外化※を伴うこと
- ※問題解決のために知識を使ったり、人へ話したり書いたり発表したりすること

おわりに

学生の言語能力の向上は一朝一夕にはいかない。大学での専門科目を学ぶ上でも、しかも昨今導入されているアクティブ・ラーニングを行って、深く意味のある学びとするためにも、専門分野の基礎的知識の定着があってできることである。^{注17)}繰り返しになるが、その基礎的知識の定着は基礎的・基本的な言語能力が備わってできることである。拙稿で検討した自宅学習課題は、協同的学習を通じたアクティブ・ラーニングではないが、学生自身の学修に対する基礎的体力を養う上でも十分に意義があろう。

今回の自宅学習課題は、筆者が現在を含むこれまでに担当していた言語能力の向上を図る科目群で学生へ課した様々な課題のなかから、エッセンスを取り入れた試行錯誤の結果である。結局、読むことと理解することと書くことという、いわゆる基本的な国語の内容である。そして、理解するために言葉の意味を正しく知ること、そのために自分で調べて確認することが加わっている。いず

れも小学校時代から行われる基本的な学習内容で、目新しいことではない。それらを越えずして、言語能力の獲得はないということであろう。しかし、何より大きいことは、課題の出発点となる読む文章を学生自らが決定していることである。その意味では、自身が決めた課題で読む、調べる、理解する、考える、書くという学修行為を行っていることになる。これが学生自身の気付きや学びにも繋がる要因であろう。

今回は、自宅学習課題のみを取り上げて検討したが、授業との関連をさらに強化、明確にし、ディープアクティブラーニングとなるよう研究改善していきたい。

(注)

- 1) 幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領は平成 29 年 3 月公示、高等学校学習指導要領は平成 30 年 3 月に公示される。
- 2) 平成 8 年 7 月 19 日付けの中央教育審議会による「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の第一次答申による。
- 3) 「人格の完成」や「個人の尊厳」など、これまでの教育基本法に掲げられてきた普遍的な理念は大切にしつつ、新しい時代に向けて「知・徳・体の調和がとれ、生涯にわたって自己実現を目指す自立した人間」、「公共の精神を尊び、国家・社会の形成に主体的に参画する国民」、「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人」の育成を目指すとする。
- 4) 中央教育審議会が平成 20 年 12 月 24 日に答申した「学士課程教育の構築に向けて」において示される。
- 5) 平成 21 年 1 月 20 日に行われた学術分科会(第 29 回)・学術研究推進部会(第 22 回)合同会議での配付資料による。
- 6) 平成 18 年 1 月 20 日付け
- 7) 平成 30 年 2 月付けの「人生 100 年時代の社会人基礎力について」の提言による。
- 8) 独立行政法人日本学生支援機構が主催する平成 28 年度インターシップ等専門人材ワークショップにおいて、公益社団法人経済同友会の資料「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待」による。平成 28 年 12 月 6 日開催。資料は平成 28 年 3 月 9 日付け。
- 9) 中央教育審議会による答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」による。平成 23 年 1 月 31 日付け)
- 10) 文部科学省のホームページによれば、「確かな学力」とは「知識・技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたもの」をいう。
- 11) 学力については、山内乾史「大学生に求められる学力とは何か(その 1)」(『神戸大学大学教育推進機構大学教育研究』第 20 号、平成 23 年 9 月 30 日)に、そもそも学力論争とは、学力についての共通理解の上に立脚するものではなく、共通理解がないままに行われたものであり、認識が共有されていないこと自体を他者と共有認識することが実りのある学力論へと発展することの指摘がある。ここでは、さまざまな知識によって養われる能力という意味で使用する。
- 12) 平成 16 年にも文化審議会国語分科会によって「これからの時代に求められる国語力について」が答申され、国語力の重要性を再認識したうえでその能力の向上が目指されている。そもそも、こういった国語力や言語能力が注目され始めるきっかけとなったのは、平成 15 年度に OECD(経済協力開発機構)が行った学習到達度調査(PISA)で、日本の子どもの読解力が低下するという結果が示されたことによる。文化審議会の答申はこの翌年のことであるが、この諮問そのものは、PISA の結果が出る前年のことである。
- 13) 平成 28 年 8 月 26 日付けの報告による。
- 14) (注 13) に同じ。教育課程部会による平成 28 年 8 月 26 日付けの「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」の報告における資料 1 を参考とした。
- 15) 中央教育審議会による平成 24 年 8 月 28 日付けの答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」における「用語集」。
- 16) 平成 27 年 8 月 26 日付けの「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」の補足資料 5 による。なお、アクティブ・ラーニングの一般的特徴は、松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング大学授業を深化させるために』序章より引用され、「Active Learning: Creating Excitement in the Classroom (Bonwell & Eison, 1991) に基づき著者が再構成したものであるという。
- 17) 大西俊弘は「基礎知識を定着させる場面においては講義型の授業も当然必要となってくる。そのことを理解せずに、従来型の講義を否定・軽視する風潮があるのは残念なことである。」と述べる。「『アクティブ・ラーニング』と日本の学校教育」、『龍谷教職ジャーナル』第 3 号、平成 27 年)

- 2018.8.10 受稿、2018.8.10 受理 -